愛伝舎との出会い

加藤　恵美子

昨年３月、私は３２年間勤めた小学校教員を退職しました。職場の先生方・子どもたち・保護者・地域の方々にとても恵まれ、「先生って良い仕事だなあ。」という思いを持ちつつ、また何か子どもたちに関われる仕事があれば・・・・という余力を残しながら、ひとまずピリオドを打つことにしました。

そして、４月からは小学校非常勤講師として、今までとは違った角度・視点から、学校、子どもたちと関わるようになりました。取り組んだり、理解したりするのに十分な時間を必要とする子どもたちへの個別指導でした。学級担任をしているときには、単元を進めていかなくてはならず、十分に指導することが物理的に難しいのが実情でした。個別指導をしてみてわかったことは、個人差・学力差はあるものの、どの子もわかりたい、できるようになりたいと望んでいるということです。

そんな時でした。愛伝舎から外国につながる子どもたちへの学習支援をしてもらえないかというお話がありました。「えっ、愛伝舎って何？」というところからのスタートでした。
私の今までの経験を生かして、役立てる場、必要としてくれる場があるのなら・・・という気持ちで引き受けることにしました。

愛伝舎に関わって見える方々というのは、私にとって新たな出会いでした。とてもクリエイティブで、いろいろな新しいことに挑戦していかれるのは、今まで働いていた教員の中では出会えなかった人たちであり、新しい空気でした。

最初にかかわったのは高校入試を２ヶ月後に控えた日系ブラジル人の中３の女の子でした。３年生なら当然知っているだろうと思われた「ｂｅ動詞」「規則動詞」「不規則動詞」等々、それらの日本語の意味がわからずスタートからつまずいていたのです。文法を理解するための日本語の意味がわからなかったことに気づきました。わからなくても「わからない。」とも言えず、級友のなかに埋もれて過ごすことに慣れてしまっていたのでしょう。何からたずねてよいかわからないからといって、一つ一つ意味を説明している時間はありません。とにかく過去５年間の入試問題（過去問）に取り組んで、問題の傾向・答え方に慣れることにしました。
幸いなことに、ポルトガル語が日常会話であるために英語のリスニングにはさほど抵抗なく、文章の大まかな意味を聴き取れました。彼女は希望の高校に合格することができ、元気に高校生活を送っています。

現在、小学生２人、中学生４人の子が勉強にやって来ています。にぎやかに日本語・ポルトガル語が飛び交っています。

もうすぐ夏休みが始まります。夏休みの課題・今までの学習の復習や補充など取り組む中で、「ここがわからない」「あーわかった」という言葉が子どもたちからたくさん出るように学習支援をしていきたいとおもいます。

今後の予定：　７月２６日（予定）…運営委員会